読むことの対話的交流を目指す授業

―芥川龍之介『羅生門』による学習者の読みの交流―

松本誠司

学習者にとって『羅生門』は、多様な解釈の生ずる過程で、作品の発するメッセージを見極め難い小説であると考える。〇一年度実践では、学習者に解釈及び感想を複数回記述させ、それを交流させることで授業を組み立てた。そこでは、『羅生門』が多様な読みを許容する点で対話的交流の授業にとって有効な教材であることを再確認できた。ただし、学習者がテクスト内に設定された「作者」を捉え、その批評態度を明らかすることについては、中途半端な達成であった。〇四年度はこの点の改善を目指した。

一　読むことの授業方法論の概観

文学テクストを教材とする授業で、学習者に他者の感想に対する感想を複数回書かせて彼らの発想を引き出し、それらをすべて印刷・配布し、学習者間で交流させることで読みを深めていく方法を試みている。ここでは、教室実践の観点から学習者の対話の対象としてテクスト・他者・自己の三者を想定し、これらを組み込んだコミュニケーション・モデル（個人内におけるテクストとの対話／個人間の（他者との）対話／個人内におけるテクストとの再対話・自己との対話）に段階的に対応させて授業を進めていく。

学習者に個人内でテクストとの対話をさせるために、W・イーザーの受容理論の長所を踏襲した上で、テクストの言葉と言葉との結合可能性に着目し、そこに生じる〈空所〉を補填することで読み進める方法を採用している。テクストの記述だけでは一見判断不可能な〈空所〉に意味を補填する推論的な解釈にこそ、個人内の読みの独自性が求められると考えたのである。

〈空所〉に反応した個人内の読み（学習者の記述による）を対話の場に引き出すのが次の段階である。ここでは学習者の解釈を分類したものを教室で読み合わせ、彼らに先行解釈に対する感想を記述させる。この作業を複数回繰り返すことで読みの対話的交流をはかり、解釈が個人内で改められる様子に注目していく。

その時に再三行われるであろう個人内におけるテクスト

との対話、自身との対話までも記述させる。これらを経て、テクストの解釈は深まったのか、学習者は解釈を通して自己の読みを対象化したのかといったことを明らかにするのが最終的な課題となる。

二　授業展開とテクスト内「作者」の取り扱い

前述の方法をふまえ、〇四年度は計九時間の授業を行った（高校一年生四〇名対象）。

第1～3時　読解①～③
第4時　読解④及び第一次記述（読み終わってさらに疑問として残ったこと／読みのテーマ設定）
第5時　第一次記述読み合わせと第二次記述（解釈記述）
第6～7時　第二次記述読み合わせ①～②
第8時　第三次記述（解釈に対する解釈／自己評価）
第9時　第三次記述読み合わせ

〇一年度実践では「下人」の生を価値づけた上で、現代に生きる者の視点を学習者自身が解釈へ取り入れることを目標としていた。そこでは「下人」へのプラス・マイナス双方の評価は解釈として得られたが、評価者としての学習者自身が前景化しており、印象批評に近い解釈もあった。また、学習者の解釈に影響を与えたのが作家芥川なのか、テクスト内に設定された「作者」なのかが不明瞭で、「作者」の批評態度を明らかにできなかった。

そこで、テクストの語りの部分と語られる部分とを峻別し、評価者としての「作者」を意識しながら、「下人」の生き方を現代の視点で見つめさせたいと考えた。『羅生門』のような物語内容の時間の流れの中に明らかに「作者」の時間（語り手の記述時点）が入り込んだテクストの場合、二つの時間の存在について学習者に伝える必要がある。〇四年度実践では、ほとんどの読者が『羅生門』を読む過程で何度も出現する「作者」を意識してしまうことを手がかりに、教授者からの補助線として「作者」の語る行為の存在について学習者に伝えることを試みた。次の構造図を読解の初期段階から何度か板書し学習者に示した。

語り手の語る行為
↑
……　登場人物への評価
語られる内容

勿論、この板書内容が読解段階で権威的に機能してはならない。読みの方向付けが解釈の制約としてではなく、テクスト内奥へ接近するための方法として提示されることが重要である。読解の授業がテクストの言葉と言葉との結合

可能性に目を向けるための場となるようにし、解釈のための発想の妨げにならぬよう努めた。

三　『羅生門』による学習者の対話的交流

学習者による記述を分類するための指標は、次の●1～5の読みの段階のそれぞれに、続く①～⑤の内容に関する下位分類の指標を組み合わせ、学習者の疑問を配置しながら作成した。

●1　作品の記述から判断可能な疑問（第一次記述）
●2　解釈されるべき部分についての疑問（第一次記述）
●3　読みのテーマ設定（第一次記述）
●4　作品についての解釈（第二次記述）
●5　解釈に対する解釈（第三次記述）

①「人物」に関するもの
②「状況」に関するもの
③「出来事・事件（エピソード等）」に関するもの
④「展開（クライマックスとその前後の過程）」に関するもの
⑤「語り方（注目すべき語りの方法）」に関するもの

第一次記述で得られた疑問点及び読みのテーマ設定の読み合わせを終え、解釈の記述を行った。この第二次記述で反応が多く集まったのは、時代や状況の人物への影響についての解釈、「下人」の心理変化についての解釈、登場人物の今後についての解釈であった。「語り方」に注目しながら作品のメッセージに触れた解釈も得られた。テクスト内の「作者」を意識したものもあり、読解段階での補助線（前掲構造図）がある程度機能したようだ。

第二次記述の読み合わせの後に第三次記述を行った。ほとんどが共感的反応であり、先行解釈を元に自説精緻化に向かう解釈が多かった。授業では、読み合わせの過程で第二次記述と第三次記述とを関連させながら、読みの対話的交流を促した（資料として第二次・第三次記述の対応を表にしているので参照のこと）。

紙数の関係上、ここでは「語り手」についての解釈（第二次記述）を受けて書かれた作品のメッセージ的なものの解釈（第三次記述）に絞って、具体的な対話的交流の様子を再現してみたい。

授業では、時代・状況が人間に与える影響について考えさせ、「下人」の心理変化に注目し、「下人」の行方についての解釈を読み合わせた後、「語り手」へと注目していった。【●4・⑤・1】及び【●5・⑤・1】（分類番号については資料を参照のこと）に分類した記述は「語り手」の方法についての解釈であり、物語内容を語る「作者」という見方を十分に意識した解釈も為されている。まず、〈末尾で作者は下人を自分の支配から解放しているという解釈〉（第

二次記述）を挙げる。

○第二次記述《分類番号【●4・⑤・1・03】》

（前略）下人は羅生門の上で老婆と話をしていく中、「こんなにコロコロ人間の気持ちは変わるのか」と思われるほど気持ちが変化していました。私はその下人の不自然さには作者の意図があると思います。作者はここであえて私達に下人に対する疑問を抱かせ、生死の境に立たされた時の人間の気持ちと行動について考えさせたかったのだと思います。だから、下人の行動の善悪について作者は書かず、私達に考えさせようとしているのだと思います。では、最後の部分の「下人の行方はだれも知らない」というのも、作者が私達に続きを考えて欲しいからなのでしょうか。私はそうは思いません。だれも知らないのだから作者も知らないはずだと思います。こう書くことにより、作者は下人を作者に動かされていることから解放したのだと思います。（後略）（傍線は引用者による・以下同）

末尾で「作者」が「下人」を「解放」し、読者からの批評の余地を残したという解釈である。「解放」という言葉に力があったせいか、この解釈に対する反応は六名という最も多くの反応を集めた。【●4・⑤・1・03】に対する主な反応を挙げる。

○第三次記述《【●5・⑤・1・04】》（共感的反応）

（前略）読者に続きを考えてもらいたいというのは思ったけど、下人を解放するという考えまでは思いませんでした。でも聞いていたら、下人は作者によって動かされていたんだと思いました。

○第三次記述《【●5・⑤・1・07】》（共感から考察へ）

私は、この解釈を読んで「羅生門」という小説は、（中略）読みによって広がる世界の広い小説だと思います。読み手から様々な読みの答えが返ってくるので、読み手が小説を読むことによって小説がつくられていくのではないかと思います。そこから、読み手それぞれが小説に添えられた作者の思いを感じとっていくことを意識して芥川は書いたのかもしれません。（後略）

後者の解釈は無軌道な意味での多様性を許容しているのではなく、解釈すべき点を通過した結果もたらされた批評の場に「作者」と一緒になって読者として立ち会おうとする態度が伺える。

なお、「作者」が「下人」を解放すると解釈した学習者自身は、第三次記述において、他者の解釈（やはり「語り手」に触れたもの）を用い自説の補強へと向かっていた。

○第三次記述《【●5・⑤・1・10】》（語り手の分析から自説補強へ）

私も、やっぱり「語り手」が「作者」という名で出て来る作品は珍しいし、その事には意味があると思います。そして芥川が「作者」を物語の中に登場させることにより、少し遠まわしに自分の思いを伝えているのだと思います。では、芥川の思いとは何なのか。私は芥川は下人の行為・老婆の行為の善悪を明確に伝えたかった訳ではないと思います。善悪についてはっきりさせたいのなら遠まわしに言っていては読み手に伝わらないからです。私は芥川は「作者」に自分の思いを代弁させることにより、芥川自身の解釈を私達読み手に押しつけないようにしたかったのだと思います。そしてこの「羅生門」を通じて自分自身の心の動き、善悪の判断について考えてほしかったのだと思います。

ここでは「下人」の行方を明確にしなかった「作者」が意識され、芥川は「解釈を私達読み手に押しつけない」者であり、「自分自身の心の動き、善悪の判断」の解釈を促すという作品のメッセージ的なものの解釈が見られた。こういった解釈を対話的に読み合わせる過程でメッセージ的なものへの視線が学習者に作られ、教室にまとめ段階に向かう雰囲気が出てきたように思われた。

四　教室にできあがった読みについて

対話的交流は更に広がっていったが、読み合わせの過程で教室にできあがったと教授者に感じられたのは次の読みである。

○時代・状況の影響によって善悪の間で揺れ、悪の正当化を求めていた下人を、老婆の言葉が刺激し、下人は行為に至ることになったという解釈。
○下人の行方については多様な解釈があるが、悪の否定として下人の末路をマイナスで捉えたものが多い。
○小説の人物を作られたものとし「作者」がその世界を動かしているという見方。
○読者は「作者」から解釈の機会を与えられているという見方。
○善悪の判断等は読者に任されているが、愚かな人間といった解釈は基本的なものとしてある。

これらを板書し読み合わせの授業を終えた。○一年度実践に比べ、○四年度実践では「作者」の存在をふまえた人物評価が行えたのではないかと考える。授業内での教授者による補助線の効果について更なる検証は必要だが、教室の読みは方向性を保った上で一応の活性化を得たと考えている。

五　『羅生門』を用いて授業を行うことの意義

○四年度実践では、読解段階で「作者」の機能について補足したこともあり、「語り方」に触れた解釈を含め、すべての解釈の適切な分類を心がけた。影響力の強い解釈の存在ばかりに注目するのではなく、全ての解釈を適切な場所からの発信とみなし、それぞれの解釈の連鎖を目指そうとしたのである。これまでの対話的交流の授業では、影響力のある解釈の有無によって教室の読みの活性化に差が出るように感じられたが、それぞれの解釈の場所を明確にすることで、影響力のある解釈も、印象を記したにすぎないものも、それぞれが影響し合う可能性があると感じられた。

このように解釈枠としても機能する分類指標の適切な設定は重要である。分類指標は学習者による疑問の記述を元に設定されるべきであるが、文学研究における先行解釈の参照は必要であろうし、テクストの構造把握が大切である。その点、『羅生門』はテクスト内に「作者」が設定されており、「語り方」への注目を容易に行える点に特徴がある。以上のことから『羅生門』を通して学習者が得ることのできる観点について記しておきたい。

○「作者」という明確な登場人物によって「語り方」に注目することができる（方法への接近）
○「作者」に注目することで物語内容への批評意識の読み取りに近づける（メッセージへの接近）
○批評視点が自己評価へと及ぶことで小説の与える読者への影響を考える入口に立てる（自己への接近）

以上のような効果の総体としての小説というジャンルを意識することにも期待できよう。これらの点に触れることができるならば、高校一年生という小説精読の入門期の段階で『羅生門』を授業で読むことに意義を見出せると感じる。

そして、こういった接近法を得るための手段として対話的交流の授業という場にも意義が見出せるだろう。〈対テクストの読み〜対他者の読み〜対自己の読み〉の過程で学びの対象となっているのは、テクストそのものに触れることと、それを読み解いていく読者である他者と自分自身の双方に触れることである。ここに『羅生門』というテクストを批評しながら読む、すなわち文学作品そのものを読み解くと同時に、その『羅生門』を解釈する自分を批評しながら読むという二重の目的が捉えられると考える。

今後も文学教材の授業において、多様性を重んじ、多様なだけで拡散する読みに留まることなく、学習者の批評者としての視点を刺激する場の確立を目指したい。

（広島市立基町高等学校）

資料　第二次記述と第三次記述の対応

●4 第二次記述における解釈	第二次記述数		対応する第三次記述数	●5 解釈に対する第三次記述（共感・精緻化等）
●4・①・2 → ●5・①・2「人物」に関する解釈／老婆について				
01 老婆の家族についての想像	1	→	1	→01 共感及び分析。
●4・②・2 → ●5・②・2「状況」に関する解釈／下人の住む今（時代背景・羅生門）について				
01 人も人の世もともに儚いものである。	1	→	1	→01 共感。
02 生きるための行為は時代背景を反映している。	1	→	1	→02 共感及び分析。
03 時代の状況下、自分の為に弱くなってしまうこと。	1	→	1	→03 共感から人の弱さの解釈へ。
04 時代の中に行為を正当化させるものがあった。	1		0	
05 社会の状況によって考え方を変えてしまう人間。	1	→	1	→04 共感。
06 夜や雨という背景が下人の心理を反映している。	1	→	1	→05 共感。
●4・④・1 → ●5・④・1「展開（クライマックスとその前後の過程）」に関する解釈／下人の行為について				
01 下人は生きるためなら何でもしてよいと考えた。	1	→	1	→01 共感。
			1	→02 疑問への展開。生きるためだけか。
●4・④・2 → ●5・④・2「展開（クライマックスとその前後の過程）」に関する解釈／下人の心理変化について				
●4・④・2全体から		→	1	→01 時代状況の影響と心理理解に言及。
01 追い込まれるとちょっとしたことでも心が動く。	1		0	
02 人間は他人の言動ですぐに心が変わるものだ。	1		0	
03 心理の解釈はできない。気持ちの変化が急すぎる。	1	→	1	→02 共感。
04 悪を正当化する気持ちはもともとあった。	1	→	2	→03～04 共感から自説の展開へ。
05 踏み出せずにいる自分の憎悪を老婆に向けた。	1		0	
06 こんな状況を生んだ世の中への憎悪と冷める様子。	1		0	
07 矛盾した気持ちは青年性のあらわれである。	1	→	1	→05 共感からメッセージ解釈へ。
08 下人の心理は老婆の言動の影響で変わっていった。	1	→	1	→06 共感。
09 下人は悪を自分に納得させる理由を探している。	1	→	4	→07～10 共感及び分析。／自説精緻化へ。
10 生きるための自己肯定のために他者を使っている。	1	→	3	→11～13 共感及び分析。／メッセージ解釈。
11 下人の悪への変化は成長である。	1	→	1	→14 興味を示すも成長を良いとは思わない。
●4・④・3 → ●5・④・3「展開（クライマックスとその前後の過程）」に関する解釈／老婆の行為・論理について				
01 老婆の行為は善悪の境目を伝えている。	1		0	
02 老婆の中に自分への憎悪がある。	1		0	
03 老婆の論理は罪悪感からの言い訳である。	1		0	
●4・④・4 → ●5・④・4「展開（クライマックスとその前後の過程）」に関する解釈／下人の行方について				
01 意志の弱さのため盗人になる。	1		0	
02 老婆によって盗人という生きる術を見つける。	1	→	1	→01 共感。
03 盗人として生きる。なろうとする決心があった。	1		0	
04 下人は盗人として生き、老婆も生きようとする。	1	→	1	→02 共感。上乗せ物語へ展開。
05 下人は常に悩み続け、その答えは常に揺れる。	1		0	
06 下人は意志弱く、罪の意識はずっと消えない。	1		0	
07 盗人になることへのためらいは残る。	1	→	1	→03 共感。自説との共通点確認。
08 下人は生き延びたかどうかわからない。	1	→	1	→04 共感及び分析。報いを受ける。
●4・⑤・1 → ●5・⑤・1「語り方（語りの方法として注目されるもの）」に関する解釈／語り手の方法について				
01 曖昧な表現に意味がある。	1		0	
02 芥川独自の表現の意義。独創性のアピール。	1	→	2	→01～02 共感と芥川の評価・賞賛へ。
03 作者は末尾で下人を自分の支配から解放している。	1		4	→03～06 共感及び分析。
		→	1	→07 共感。小説の読み方について考察。
			1	→08 共感。付け足し（下人も独立した人物）。
04 語り手の設定の意味。隠された芥川の思い。	1	→	1	→09 共感。
			1	→10 共感及び自説の補強。
●4・⑤・2 → ●5・⑤・2「語り方（語りの方法として注目されるもの）」に関する解釈／作品のメッセージについて				
01 人が悪に傾く過程を伝える。	1		0	
02 人の心は他者によって変わり自己正当化に向かう。	1		0	
03 下人の大人への成長を伝える。	1		0	
04 青年期の感情を見つめさせ、自己を見つめさせる。	1	→	1	→01 共感及び自説精緻化。
05 読者により解釈が違ってくることに期待する作者。	1	→	1	→02 共感。